
とある日常の一コマ

蒼咲 秋人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある日常の二コマ

【Nコード】

N2357J

【作者名】

蒼咲 秋人

【あらすじ】

学生生活をただ淡々と過ごしていた主人公。

今日も今日とて普段と変わらぬ平和な学生生活を満喫しようと考えていたそんなある日……ある女の子の告白により、いつもとは違った学生生活を送ることになる。

「先輩！ 私と……私と、付き合ってくださいっ！！」

突然の告白に僕【赤守 優 あかがみ ゆう】は啞然とした。

「えと……その」

「……先輩」

「うっん。ちょ、ちょっと考える時間が欲しい、かな？」

「は、はい……。ですけど、わがままなのはわかっていますけど、私は、今すぐにも先輩の返事が……聞きたいです」

顔を真っ赤にさせながら答える彼女に、僕は「うっ」と唸り、たじろいだ。

たぶん、僕も彼女に負けなくらい、顔が真っ赤になっているだろう。

うん。オーケー。落ち着こう僕。ここは深呼吸だ。深呼吸。深呼吸。

「すー……はあ……うん、大丈夫」

少し落ち着いた僕はそう言って、心配した面持ちの彼女に苦笑を含めた笑みを浮かべた。すると彼女は、赤くなった顔を更に赤くさせて、顔を俯かせながらもじもじとしはじめる。

——か、可愛い。

僕は彼女の様子に思わず、そんなことを思ってしまった。

確かに、彼女は可愛いと言える部類に入るだろう。サラッとした切れ細やかな黒髪を肩より少し下まで伸ばして、体の凹凸がはつきりとわかるほどの体系。目鼻立ちも整っており、パツチリと開いた目なんかは人懐っこさを感じさせる。

容姿に比例するように、学年で上位に入る程の学力の持ち主で、人並み以上に運動もできる彼女は、総合的に見て、まさに「美少女」と呼ぶに恥じのない女性だろう。

性格のほうも悪い噂を聞かないし、むしろいい噂しか聞かない。当然数多くの男性に告白されているだろうし、実際僕も彼女が告白されている場面を偶然見たことがある。

彼女のことから男性と付き合えば、そういった噂が嫌だといったも耳に入るだろうし、そんな話題がでていないということは、すべての交際の申し出を断ってきたのかもしれない。

そんな、美少女プラス撃墜王の称号を得た彼女に告白されているわけで……。

僕は自慢ではないが、学力・運動・容姿的に見ても一歩飛び出るような要素を持ち合わせていないし、他の人から見れば、上でも下でもなく「普通」といった言葉で言い表されてしまうだろう。

そんな僕に告白をする女性、ましてや彼女「桜坂 黎 さくらざ か れい」に対して僕の頭の中は困惑と動揺に満たされていた。

確かに、彼女とは一応知り合いという部類に入る。僕はこの2年間陸上部に所属していて、彼女はそのマネージャーなのである。といっても、生徒会にも入っている彼女は、あまり部活に顔を見せないのだけれど……。

そんな、人付き合いが苦手な僕とあまり部活に顔をださない彼女とでは、当然話したことなんてほとんどなく、あったとしても、せいぜい「おはよう」や「お疲れ様」といったような挨拶ぐらいなものだった。

僕は彼女から告白されるような要因が全くわからず、動揺の色を顔に浮かべながら、震える声で彼女に声をかけた。

「あの……こんなことを聞くのはなんだけど、その、僕のどこを好きになったのかな？」

「それは、その、入学当初に、たまたまなんですけど。誰もいないグラウンドで、一人自主トレーニングをしている先輩を見て……その、男らしくてかっこいいなって……」

「そ、そうなんだ」

確かにごくたまにだが部活が終わった後、一人残って練習したことがあるけど、まさかそれを見て男らしいと思うとは……。

「先輩。あ、あの……返事の方は……」

目をウルウルとさせて、やや上目使いで彼女は僕を見つめる。

や、やばい。彼女のその眼は強力すぎるっ。自分の意思とは反して了承してしまいそうだ。

僕はその衝動に焦りを感じ、一度自分を落ち着かせ、ゆっくりと、そしてハッキリと彼女に答えを返した。

「ごめん。君とは、付き合えない」

その言葉に、桜坂黎の眼が大きく見開かれる。

「い、いやいや！ え、えーと、あの、他に好きな人がいるとかそうじゃなくて！ その、なんて言うか……」

うう。なんか凄い罪悪感を感じる……。だけど、僕が彼女の告白を断る理由、断固たる理由があるわけで……。

僕は大きく息を吸って、ゆっくりと吐く。その深呼吸を数回繰り返して、そして決意を込めた眼を彼女に向けた。

「だって……僕と桜坂さんは……その、同性じゃないか」

そう言って、女子陸上部員の僕【赤守 優】は、困惑した様子の彼女に微笑みかけたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2357j/>

とある日常の一コマ

2011年1月26日06時44分発行